

リチャード・ライトの『アウトサイダー』について

木内 徹*

On Richard Wright's *The Outsider*

Toru KIUCHI*

Richard Wright's *The Outsider* is a result of his critical comparison between the United States and France, that is, a critical analysis of the difference between what happened to Wright's life in both countries: racism in the American South, the rift with the Communist Party in Chicago, and the popularity as a bestseller writer in New York, and the cordial invitation by the French government, the nihilistic atmosphere after World War II, and the influence by the works of Kierkegaard and French existentialist writers such as Sartre, Beauvoir, and Camus. The aim of this essay is to clarify how *The Outsider* is born out of the author's comparison between his experiences in France and the United States.

キーワード：African American culture, Richard Wright, Existentialism

I

アメリカとフランスの比較、そこから『アウトサイダー』¹⁾ (以下 *O* と略す) は生まれた。リチャード・ライトが両国から受けた扱いの差、つまりアメリカ南部で受けた苛烈な人種差別、シカゴで体験した共産党との軋轢、ニューヨークで得たベストセラー作家としての知名度あるいは大都会で黒人が生き抜くための厳しい現実、それとこれから述べるフランスで受けた政府招待による国賓的待遇、第2次世界大戦後のヨーロッパの虚無感、サルトル、カミュ、ボーヴォワールとの交流によって知った実存主義哲学、などとの落差は、初めてヨーロッパを訪れたライトにとってあまりにも大きな衝撃であり、そこに *O* という複雑な化学反応が起こった。

O は、シカゴとニューヨークを舞台にしなからそのほ

とんどはパリで書かれたものである。主人公のクロス・デイモンは、シカゴの郵便局員だが妻グラディスから愛想をつかさされ、愛人ドットは16歳で妊娠し、局には申し開きできない状態となり抜き差しならない立場になる。そのようなときたまたま乗り合わせた地下鉄が重大事故を起こし、クロスは死亡したと報道されて、これを好都合としたクロスはライオネル・レインと名前を変えて別人として生きることとする。偶然出会ってしまった黒人仲間のジョー・トマスを秘密隠匿のため殺害したのちニューヨークへ行き、そこで出会った共産党員ボブ・ハンターを通じてもう1人の共産党員ギル・ブランドとその妻イーヴァの家に仮寓することとなる。そして黒人嫌いのファシストの大家ハーンドンとギルがとっくみあいの喧嘩をしているところへ出くわしたとき、2人を同時に殺してしまい、さらにもう1人の共産党員ジャック・ヒルトンをも殺す。ギルの妻イーヴァはクロスを愛する

*日本大学生産工学部教養・基礎科学系

ようになるが、彼女はすべてを知ったとき絶望的になり飛び降り自殺する。クロス自身もせむしの検事イーライ・ヒューストンにすべてを見抜かれ、共産党員の銃弾によって倒れてしまう。

本論は、ライトにとってのアメリカとフランスを比較し、そこからいかにこのような作品が生まれたのかを明らかにすることを目的とする。

II

1946年4月25日、フランス大使である社会人類学者のクロード・レヴィ・ストロースがライト宛に「フランス政府は貴殿に公式招待客としてここに招待状をお送りし、フランスまでの旅費と1か月間の滞在費をお支払いすることをお知らせするのはまことに喜ばしいことでもあります」²⁾と手紙を書いて、ライトは初めてフランスの土を踏むことになる。ライトがパリを訪れたのは1946年5月9日だった。そして翌年の1947年1月11日までの約8か月間フランスに滞在する。ライトは、初めてパリの町並みを見てこのような感嘆の言葉をもらった。

なんと美しいんだ！ まったく美しい！ 1つの都市がこんなに狭い場所に、これほどたくさんの宝、こんなにたくさんの花、こんなにたくさんの灰色の石でできた建造物を持つことができるとは知らなかった。しかもどれもみな美しい、とても美しいのだ。³⁾

この感激の言葉と、ライトが1927年11月下旬に初めてアメリカ南部からシカゴに到着したときの次の言葉と比較すれば、ライトがいかに希望に満ちてフランスを訪れたかは明らかである。

黒く坦々と広がるシカゴの街並みを初めて眼にした時、わたしは頭に描いてきた幻想を完全に踏みつぶされて、失望し、当惑した。シカゴは現実の都市とは思えなかった。神話を思わせるようなその家々は、灰色の煙に陰気くさくくるまった黒い石炭板^{せつたい}でできていて、その土台はしめった大草原の中に徐々に沈みかけているように思えたから。水蒸気が、冬の日射しの中でぽっつぽっつとくすんではいたが、時おりもの知り顔の地平線の上でちらっ、ちらっと光った。都会の騒音が気になりだしたが、それはそれからの数年間、心からはなれなかった。⁴⁾

単なる景観上の差ばかりではない。ライトに対するフランスとアメリカの歓迎の仕方の違いはあまりにも大きい。ライトは、1935年4月25日に初めてニューヨークを訪れるのだが、黒人を泊めてくれる宿がなく寝るところ

さえも見つからず、夜中の3時にとうとうたどりついたのはハーレムの友人宅の台所だった(BB [AH], p. 408)。それに比べて、パリで最初に宿泊したホテルは高級ホテルとして知られるトリアノン・パレス・ホテルであった。そしてパリ市役所の公式歓迎パーティーで到着後の翌々日5月11日に、名誉市民に叙せられる(Quest, p. 303)。これについてライトはエッセイ「私は離国を選ぶ」の中で両国の違いをこう比較している。

パリ滞在の最初の1週間は、パリの人々による如才ない扱いを受け、私はここで社交上やっつけられる自信を持った。フランス人とアメリカ人の態度の違いを見て、白人のアメリカ人が非常に暴力的な人種差別を行うのは野蛮であるせいだと思った。(“I Choose Exile,” qtd. in Quest, p. 303)

そして、『トゥワイス・ア・イヤー』誌の編集者である友人ドロシー・ノーマンへの5月12日付け書簡の中でも、この歓迎パーティーについて、フランス政府の歓迎ぶりに「困惑し、自信が付き、また恐ろしくもある」⁵⁾と感じたとさえ述べ、さらにハーパー社の編集者アズウェルに送った5月15日付けの手紙の中でも「人種差別がないので、少し非現実的にさえ思えます(seems a little unreal)。なかでも驚いたことは、パリの人々が私に対して紳士的な態度で接することです。パリは本当の意味で紳士的な街です」(Quest, p. 306)と書いている。両国のライトの扱いの差の大きさとまどいさえ覚えている。あまりの差に、ライトにはパリが「非現実的」(unreal)に思え、その結果、それまでの作品といえば『ブラック・ボーイ』や『アメリカの息子』のようなりアリズム文学であったのに比べ、*O*は同じシカゴとニューヨークを舞台としながら、主人公クロス・デイモンが地下鉄事故で死亡したと誤解されたのをいいことに別人として生きるという荒唐無稽な設定、ジョー、ギル、ハーンドン、ヒルトンの殺害、イーヴァとクロス・デイモン自身の死など、パリという「幻惑の島」(“Island of Hallucination”—未刊の長編小説のタイトル)で着想された「非現実的」な設定の作品になっている。

しかしフランスにひと月も暮らせば、第2次世界大戦直後の物資が不足した生活やフランス人の矛盾した論理に抵抗を覚えることにもなる。6月10日、彼はドロシー・ノーマンにこう書き送っている。

この国が大好きですが、そのまま好きになっているわけではありません。奇妙な古い風習がある点なども好きな理由なんです。フランス人が近代的な生活を体験したことがないところも魅力なんです。フランス人には論理的に考える伝統が大昔からあります。その論

理は自分たち以外の世界を閉め出してしまうような妙な論理ではないか、とも思いますが、自分自身の知識の中だけで考えたら、フランス人の論理は敵なんでしょう。しかし世の中はフランス人が考えているよりはるかに大きいし、豊かだし、変化に富むものです。

このように書いても、まったくそう決めつけているわけではありません。日によって感じる印象が違ってくるからです。逆に、私がいくらほめても、この国には苦しみも飢えもあるという事実を決して忘れないでください。階下に住む簿記の仕事をしている女性は腹を空かしているので時々ふらふらしています。歯がぐらぐらしているので、抜け落ちないように堅いパンを食べるのが怖いと言っています。これが1946年のパリの現実なんです。⁶⁾

アメリカで第2次世界大戦中、多少の消費物資不足の生活は強いられたとしても、その豊かな日常と、ナチス・ドイツに破壊されたフランスの疲弊した経済とを引き比べ、クロスがイーヴァに「ねえ、今度のことが片づいたら、2人でどこかへ行ってしましましょうよ。カナダのガティノー山脈の山の中へでも。あそこなら、今までのいっさいのことからは遠く離れているし、安全で、静かだから」(p. 286)と言うように、ライトも食料に事欠かない北米の生活を懐かしんだはずである。1944年8月、ライトはこのガティノー山脈の麓で夏の休暇を実際に過ごしており、その自然環境のすばらしさを熟知している。荒廃したフランスの生活と北米の豊かな暮らしを比べ、かの地を懐かしむのは当然のことである。

しかしフランスの荒地がアメリカの物質至上主義に劣ると考えたわけではない。ライトはフランスに来てみて、すべてを手に入れた物質的に豊かなアメリカ人がかえって路頭に迷っているような存在であることを感知するのである。11月19日付け刊行の『フランス映画』誌のインタビューの中で、ライトはこう言っている。

アメリカは、労働者の生活が物質的な面では楽になったかもしれないが、個々人が空虚な思いを抱き、自分ではどうしようもない不安を感じるようになっていく。どうすれば心の均衡と健全な精神を保てるか、わからなくなっている。概してアメリカ人は危機的状況には非常に強いし、生き残るために何をすればよいかわかっているのだが、今やアメリカ人はみな勝利のあとにやってきた虚無感に苦しんでいる。(Quest, p. 307)

こうしてこの「勝利のあとにやってきた虚無感」がOの大きなテーマとなる。クロスは、共産党員が次々に殺害されたことでクロスを疑うプリミンに対して次のよう

に弁明する。

その神話の世界のヴェールを破り去った荒々しい鞭は科学と工業でした。科学は徐々に別の世界、現実の世界、を描き出して勇気、工業は人間をその先祖伝来の儀式化された生存から根こそぎにして、広大な非個人的な都市の中での合理的な生活組織の中にはめこみました。人間の意識には分裂が生じました。人間は、一方ではかつて神話の世界で自分を導いてくれたトームやタブーには従いながら、現実の世界の中で生活するようなことになりました。しかしそういう生き方が長続きするはずはありません。今日われわれはその危機のまっただなかにいるわけです。(p. 357)

確かにライトは8か月のフランス滞在によってアメリカ合衆国を客観的に見るようになったことは事実である。1947年1月11日にフランスからアメリカにいったん帰国したライトは、その直後の3月に刊行された『ストックホルム・エクスプレッセン』紙のインタビューのなかで、フランスからの帰国直後の感想として、フランスに人種差別がないことを賞賛し、「アメリカの人種問題を、家族対個人、重労働対大量生産、個人主義対全体主義、東西問題(植民地の人々対白人搾取者)というような世界的な問題という広い文脈で議論するようになった」⁷⁾などと比較対照している。

同じ3月、アナイス・ニンがライトのためにパーティを開き、アメリカに住む作家としての困難について彼女が尋ねたときにライトはこう語る。

私は作家としてしか役に立たない人間だ。しかしアメリカでは、つまらない侮辱を受け、毎日のように軽蔑されて息が詰まりそうだ。私は今たった1つの課題しか考えられない。アメリカを少し離れて遠くから見るが必要なのだ。つまらない個人的な苦痛やいらだちから離れる必要がある。常に心をかき乱されるので満足に仕事もできない。作家として成長するためには自由に生きる必要がある。⁸⁾

こうしてさらにアメリカを対象化する必要を感じる。Oにはアメリカをどこか遠くから眺めたような浮遊感が作品全体にあるのはそういう理由がある。また同じく3月、やっとフランスから帰ったライトの住むニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジで、白人のならずものが黒人をレストランから放り出したり、妻が白人で夫が黒人という夫婦にいやがらせをしたりし始めた。ライト自身も妻のエレンと歩いていたときに嫌がらせを受けている(Quest, p. 312)。またライトとその伝記作家コンスタンス・ウェブは、22丁目と9番街の角にあるスナック

バーへ入ったとき、塩の入ったコーヒーを出された(*Life*, p. 349)。

アメリカをフランスという外国から8か月にわたって眺め、再びアメリカに戻ってきたことで、アメリカとフランスを冷静かつ的確に比較することで出した結論が、4月30日にとうとう書き始めた*O*の最初の25頁なのである⁹⁾。しかしライトはこのままではとても執筆に専念できないと感じたに違いない。ライトは窓から外の屋根の並びを眺めながら、心の中ではパリの絵画のような灰色の屋根の並びを思い浮かべていた。セントラルパークを散歩しながら、心の中ではリュクサンブール公園の幻想的で格式の高い美しさを思い出していた。ライトはエレンに言った、「パリに戻ろう。」彼女はうなずいた¹⁰⁾。5月下旬、ライトは苦勞して買った高級住宅地グリニッジ・ヴィレッジの家を売りに出し、避暑地ウェイディング・リヴァーへ向かった(*Quest*, p. 312)。こうしてアメリカを去る決意をしたライトはこの避暑地で*O*の執筆に集中し、6月7日までに「熱に浮かされたように5週間で」10万語を叩き出した¹¹⁾。8月8日に再びフランスに行き、二度とアメリカには帰らなかった。

III

ライトはフランス行きの船上で*O*を書き続ける。パリ到着後、フランスでの生活が始まるのだが、第2次世界大戦後のヨーロッパは物資の不足、ストライキ、公共設備の不備などで日常生活は困窮を極めた。そのなかでアメリカとは別な意味での闘いの中で書かねばならなかった。次のクロスの感懐はライトのこの当時の不安そのものを表している。

列車の車輪が冬の夜をゴトゴトと過ぎて行くうちに、彼は自分の不安感がどこから来ているかを悟った。それは彼の内部から、彼の世界であり、彼のみの世界でありながら、彼が本当に知っているとはまだいえない、この広大な神秘の世界、彼自身のものであって、しかもまだ知られていない世界、の内部から来ているのだった。そして、彼が今飛び込んでいこうとしているのも、この見知らぬ、それでいてなじみ深い、世界の中へであった。(p. 117)

11月には、フランス南東部の地中海沿岸地帯にあるコート・ダジュールで休暇を楽しみながら、*O*を3分の1ほど書いた(*Quest*, p. 334)。

*O*の中で、クロスはニューヨークへ来る列車の食堂車で知り合ったボブ・ハンターを通じて共産党員のギルの家に仮寓するようになる。そこで偶然にもギルの妻イーヴァの日記を見てしまう。その日記の中でイーヴァは夫

のギルによる裏切りを告白する。日記によれば、ギルとイーヴァは新婚旅行でパリにやってくる。6月10日付けの日記にイーヴァは「とうとうわたしの夢のまちパリへ来た！　なんとという嬉しいギルからの結婚の贈物！」(p. 206)と書いている。だが、イーヴァはギルが共産党の威信を高めるために彼女と結婚したことを知る。彼女は6月24日付けの日記には「孤独と憂鬱のおかげでわたしは病的になりかかっているみたいだ。不正ということも今迄のわたしにはただの言葉にすぎなかったが、今ではそれが現実になっている。ギルと党とがわたしの眼を開いてくれたのでわたしには見える」(p. 201)と嘆いている。激変したイーヴァの心理状態はそのままライトのパリについての感想と置き換えても差し支えない。生活の面ではライトはパリに幻滅している。それでもまだ「アメリカ全土よりパリのほんの一角のほうがまだ法的な平等がある」¹²⁾と痛感して、パリへ移住したことを後悔するどころか満足していたのである。

*O*の後半、クロスがニューヨーク行きの列車の食堂車で出会ったボブ・ハンターが共産党によってアメリカへの密入国を移民局に通報されトリニダードの死の牢獄へ強制送還される筋書きや、巻末でクロス自身が共産党員によって撃たれる事件は、1934年12月にライトが実際に目の当たりにした友人ポインデクスターが共産党から除名された事件(*Quest*, p. 106; *Life*, p. 97)や、1945年1月にハンク・ジョンソンという共産党員が党の命令で暗殺された噂(*Quest*, p. 276)が、それぞれ基になっている。シカゴやアメリカでの体験を十分に咀嚼し客観化して初めてこうした作品に実話をとりこめたのだ。

パリへ移住してまもない頃、ライトはフランス植民地から留学しているアフリカ人たちと交流する機会を持ち、当時興っていたネグリチュード運動に影響を受ける。この運動はアフリカのフランス植民地からの留学生エメ・セゼールやレオポルド・サンゴールらを中心に、1930年代に始まったもので、宗主国フランスの植民地政策である同化を拒否し、黒人であることの尊厳を文学・芸術を通して高めようという文化運動であり、この運動はその後アフリカのフランス植民地独立の気運を準備した。この運動は1947年10月に創刊された雑誌『プレザンス・アフリケーヌ (アフリカの現在)』に支えられた。ライトは、その10月5日の歴史的な第1回編集会議に、アンドレ・ジード、アルベール・カミュ、ジャン＝ポール・サルトルらとともに出席している。

*O*の執筆はこの雑誌『プレザンス・アフリケーヌ』を援助する活動による多忙のために半ば中断するが、数年後に執筆を再開したときには*O*に深味を与える結果となる。アメリカにいたときはアメリカ黒人の立場を出なかったライトが、フランスへ移住してから世界の黒人という立場に脱皮する。*O*の中で共産党員ブリミンに詰問

されて、クロスはこう弁ずる。

中国やインドなどの国々やアフリカの広大な地域は、この工業化への移行をようやく始めたばかりです。これらの巨大な国々の人的資源や天然資源は、人類の半ば以上と地上の領域の半ば以上を包含してはいますが、西洋の帝国主義の衝撃にあって、刺激を受けると同時に退歩させられてもいます。(中略)西洋の手はこれらの民族の持つ天然資源に向かって貪欲にのばされています。ところが、そうやって手をのばしたがために、黒人、赤色人、褐色人、黄色人などをその長い眠りから目覚めさせ、いやでも応でも工業化の道へつっぱしらせる結果になっています。(p. 353)

ライトにとって、アメリカ南部で白人が黒人の労働力を搾取する構図は、そのままヨーロッパの宗主国がアフリカ植民地で黒人の労働力や資源を搾取する構図と重なって見えるようになる。ライトがアメリカに在住したままで作家活動を続けていたら、このような視点は生まれなかったかもしれない。母国アメリカを国際的視点で客観的に観察して初めてこのような発想が生まれるのである。

ライトはこのあと1949年10月から1950年7月までアルゼンチンで『アメリカの息子』の映画化にとりかかっており、このあいだは小説を書く余裕はなく、Oの執筆はまたもや中断することになる。しかしアルゼンチンから帰国した直後の1950年10月5日に、ライトは自らが中心となって21名のアメリカとフランス両国籍の黒人と白人を集め、フランコ・アメリカン・フェローシップ(仏米協会)を結成する。その主な目的は、フランスにおける雇用に関する人種差別撤廃である(Quest, p. 357)。この協会は12月10日に正式に発足し、1951年の1月に60名の会員をもったのを頂点として、ギャリー・デイヴィスの平和運動支援(Quest, p. 330)や、黒人女性マーガレット・マックリーヴランドがパリのアメリカン病院に人種差別の故に採用を拒否されたことに対する抗議行動(Quest, p. 359)、アメリカ本国のヴァージニア州マーティンズヴィルで冤罪による死刑判決を受けた黒人7人の助命運動(Quest, p. 360)、5月のミシシッピ州ローレルで無実の強姦罪で死刑判決を受けたウィリー・マクギーの救援活動(Quest, p. 360)など、活発な運動を行った。しかし11月にはライトが会長をやめたために求心力を失った同協会は同年12月には役目を終えて解散した。この間、ライトはこの協会の活動に忙殺されOの執筆はまったくと言っていいほど中断してしまっただが、仏米協会の名が示すとおり、その会長としてフランスから見たアメリカという国際的かつ客観的視点からアメリカの人種差別を非難した運動は、ライトに実践的な視点を

与えることになる。フランスに移住して以来ライトが国際問題について学んできたものはもっぱら書物からであり、こうして実際に政治運動を通じて学んだのは仏米協会の活動が初めてである。Oの冒頭でクロスが地下鉄事故に遭遇し死んだことにして、新たな人生を送ることを決意したとき、このように言う。

これからどうやって時間を過ごしたらいいだろうか？ そうだ、良書に埋もれて寝て暮らすことにしよう・・・ばかな。おれはなんということを考えているのだろう。書物だなんて。おれのいま当面していることのほうがどんな書物よりもはるかに興味深いではないか。こういう現実のなかからこそ書物が作られるのだ。(p. 91)

1952年1月、やっとO執筆に復帰することができたライトは、5月半ばに原稿650枚をほぼ完成させ(Quest, p. 366)、こう言っている。

アメリカから離れたことは地理的な変化以上のものをもたらした。それは黒人として、また共産黨員としての思想信条との離別だった。私の行動と思想を考え直すいい機会となった。そして私は大きな課題と取り組むことになった。その課題とは、全体としての西洋文明の問題と意味、そして黒人とその他の少数民族との関係である。

この取り組みから『アウトサイダー』は生まれた。私の小説というのはこうやって生まれる。私が本を書くのではない。本が私にやってくるのだ。要するに、ある問題と深く関わると、本を書いてそれと取り組んだり考えたりするのだ。(Quest, p. 602 n 29)

アメリカとフランスの両国に起こった人種差別の問題にとりくむという仏米協会の運動から、アメリカ黒人であり共産黨員でもあるという立場から離脱して、西洋文明の問題と世界の少数民族を考えるOが生まれたのである。

IV

アメリカからフランスへ渡ったあとのライトの変化を検証するときに見落とせないのは、実存主義哲学の影響である。アメリカ南部の苛烈で厳しい人種差別体験によって、ライトは幼少にしてすでに実存主義哲学を体得していたといえる。

W・E・B・デュボイスが『黒人の魂』(The Souls of Black Folks)の中で言っている、黒人はアフリカ人であり同時にアメリカ人でもあるという「二重意識」の論理

は、一種の実存主義哲学的意識にも似ており、ライトばかりでなくアメリカ黒人はこの精神の二重構造を宿命として持つことになる。

『ブラック・ボーイ』には、ライトが8歳のころ、夫に去られた母親が働かねばならないために孤児院に預けられ、ミス・サイモンという孤児院の先生に養子にされるのではないかという恐怖におののく件りがある。

恐怖と不信がすでにわたしの本性の1つとなって1日として離れず、わたしの記憶力はいよいよすどくなり、わたしの感覚はいよいよとがって、自分をほかの者と戦う別個の存在として意識するようになったのだ。わたしは自分を抑制し、自分の周囲をしかとたしかめるまでは言行をつつしみ、たえず自分が宙にぶらさがっているような気持ちだった。(BB[AM], p. 35)

ところで、実存主義は『広辞苑』第5版の定義によれば次の通りである。

人間の本质ではなく個の実存を哲学の中心におく哲学的立場の総称。ドイツでは実存哲学と呼ばれる。科学的な方法によらず、人間を主体的にとらえようとし、人間の自由と責任とを強調し、悟性的認識には不信をもち、実存は孤独・不安・絶望につきまといわれていると考えるのがその一般的特色。

ここで言う「悟性的認識」とは、「弁証法的思考能力としての理性に対して、対象を固定的にとらえ、他との区別に固執する思考能力」(『広辞苑』)であり『ブラック・ボーイ』の引用にある「自分をほかの者と戦う別個の存在として意識」する思考能力である。また「実存は孤独・不安・絶望につきまといわれている」は、ライトが8歳にして「恐怖と不信がすでにわたしの本性の1つとなって」いたことに当てはまる。

そのためライトが実存主義哲学という概念を知ったとき大いに興味を持ち、これを何の抵抗もなく受け入れたことは自然なことであった。ライトが初めてその名を知ったのはまだニューヨークにいた1944年12月頃と思われ、ドロシー・ノーマンに実存哲学の先駆者、19世紀後半の思想家キルケゴール、そしてニーチェやハイデッガーの著作について教を請い(Quest, p. 299)、さらに翌年の1945年6月11日にはキルケゴールの『不安の概念』と『死にいたる病』を購入し¹³⁾、その後愛読書として常に両書を持ち歩いていた(Quest, 299)。

その年の8月、夏の休暇をカナダで過ごしていたライトを作家C・L・R・ジェームズが訪れたとき、ライトはそのとき本棚にあるキルケゴールの25冊の著作を指さし、「これを見てくれ、ネロ〔ジェームズのあだ名〕。

あの本が見えるだろ。キルケゴールが書いたんだ。彼が有名だってことを言いたいんじゃない。そんなことじゃない。言いたいのは、あの本の中に書いてあることはすべて買う前からわかっていたってことだよ¹⁴⁾と豪語するのも無理はない。キルケゴールは『不安の概念』¹⁵⁾の中で「子供たちを見るがいい。そこでは不安が、冒険的なもの、途方もないもの、謎めいたものへのあこがれとしてかなりはつきりと示されている。(中略)こうした不安は本質的に子供たちに属しているので、彼らは不安のないことを欲しないのである。不安は子供たちを不安がらせても、不安はその甘美な悩みをもってかれらを捉えるのである。その不安が深ければ深いほど、その民族は深い」(p. 64)と書いている。子供時代の不安がどこから来るか、こうしたキルケゴールの説明を待つまでもなくライトにとっては8歳の時点ですでにある意味で自明の理だったのである。

ライトの母は1919年の夏、ライトが11歳のとき、病で突如倒れる。ライトは絶望的になりながらも祖母が応援に来るまで子供ながら懸命に看病する。『ブラック・ボーイ』の中でライトは「私は祖母を待ちながら緊張して日々を過ごしていた。そして祖母がやっと到着したとき私はすべてを祖母に任せた。あとはなんでもやってもらって、質問に機械的に答えたり、黙って言うことをきいていた。1人でここまでやったのだと思いながら」(BB[AH], p. 101)と言っている。

一方、ライトが愛読したキルケゴールの『死にいたる病』には、こう書いてある。

それにしても絶望は、いま1つの意味においていっそう明らかに、死にいたる病である。この病でひとは死なない(普通にひとが死ぬと言っている意味では)。いいかえればこの病は肉体的な死をもっては終わらない。反対に絶望の苦しみは、まさに死ぬことができないという点にある。絶望はいわゆる業病にとりつかれた者の症状に似ている。彼はそこに横たわって死にさいなまれていながら死ぬことができない。かくして「死ぬばかりに苦しんでいる」というのは、死ぬことができないということであるが、といて、生きられる希望がまだそこにあるわけではない。いな、最後の希望である死さえも来ないほどに希望が絶たれているのである。死が最大の危険であるならば、ひとは生をねがう。いっそう恐るべき危険を知ったときには、ひとは死をねがう。死が希望の対象となるまでに危険が大きくなった場合の絶望とは、死ぬことができるという希望さえも絶たれていることである。¹⁶⁾

ライトはここを読んで母と自らの運命に思い至ったに違いない。かくしてOの5つの章は、不安、夢、下降、

絶望、判決と名付けられ、第1章「不安」の巻頭言には次のキルケゴールの『不安の概念』の一節を掲げることになる。

不安は人間をつかむ外的な力なのであるが、そのくせ人間は不安から自己をもぎ放すこともできないし、もぎ放そうとする意志も持たない。なぜならば、人間は自己の望むことそのものを不安に感じるからである。

あるいは第4章「絶望」で、クロスはイーヴァを失うことを予想して「あのひとを失ったのでは、そのほかのことなんかどうでもいいではないか？」と絶望する。Oの中で、絶望が「死にいたる病」であることをクロスを通して示そうとしているのである。そしてテイトが次のように述べるとおり、Oは、ライトがキルケゴールの哲学をライト流に換骨奪胎したものなのである。

ライトが自らを無神論者であると主張しても、面白いことに、彼の小説の登場人物はことごとくキリスト教の実存主義の伝統に当てはまってしまふ。さらに、ライトは意図的にキルケゴールの弁証法的心理構造を見事に実存主義小説『アウトサイダー』に応用し、ついにはキルケゴールのキリスト教的枠組みがデイモンの心理的発達とそこから起こる行動を形作るまでにした。¹⁷⁾

キルケゴールについて学んだライトは、次に1945年11月6日ニーチェの『ツァラトゥストラはこう語った』、『悦ばしい知識』、『人間的な、あまりに人間的な』、『反キリスト』、『偶像の黄昏』、『道徳の系譜』を購入して(*Books and Writers*, pp. 60, 116)、長い講演旅行の最中でも読書に励んだ。

次にジャン＝ポール・サルトルに代表されるフランス実存主義の思想を学ぶ。1946年2月26日、ライトはアメリカを訪れていたサルトルとシモーヌ・ド・ボーヴォワールと初めて会って昼食をともにし¹⁸⁾、またボーヴォワール自身はライトがいったんアメリカに帰国したあと1947年1月にアメリカを訪れさらに親交を深めている。1947年1月10日付けの『フランス文学』誌に掲載されたインタビューの中でライトはサルトルの戯曲『恭しき娼婦』についてこう言っている。

私はサルトルの『恭しき娼婦』に大いに興味を覚えた。その文学的表現は非常に興味深い。なぜなら彼は我が国の現実を深くとらえているからだ。(中略)異国からの訪問者でこれほど正確にアメリカ文明の幼さを言い表した人もいない。特に娼婦の性格は、人間的に

も今日のアメリカの視点から見ても基本的にそのとおりである。(Books & Writers, p. 140)

この戯曲は、アメリカ合衆国南部のアラバマ州スコッツボロで1931年に起こった黒人少年に対するでっち上げ裁判事件に基づいている。13歳の最年少者を含む9名の若い黒人が、2人の白人女性を強姦したかどでただちに死刑判決を受け、共産党や全国黒人向上協会(NAACP)が無罪釈放運動に取り組み、国際的な問題になった。この戯曲は、実存主義哲学の作家サルトルによって、アメリカの人種差別をフランスにおいて再解釈したもので、ライトにとってかっこうの米仏比較の材料となった。

実存哲学自体の発展は、キルケゴールから『存在と時間』で知られるハイデggerを通して、ヤスパースの『哲学』へいたる、という経過をたどり、フランスに渡ってサルトルに影響を与える。ライトが体得した実存主義哲学は、アメリカ原産、ドイツ経由、フランス着と解釈でき、ライトがいかにこうした哲学者の著者から影響を受けて書いたかは、Oの後半でクロスがヒューストンに詰問され「君のニーチェ、ヘーゲル、ヤスパース、ハイデgger、フッサール、キルケゴール、ドストエフスキーが手がかりだったのだ」(p. 421)と、その読書歴が犯行の証拠となってしまう箇所を見てもわかる。

クロスはヒューストンによってさらに犯行を追求され、妻グラディスと3人の息子たちに対面させられるが、それでもクロスはじっと耐えて罪を告白しない。しかしやがて耐えきれなくなって「誰かに話さないではいられない！ だが、誰に？ 話せる相手などはないではないか。おれはこの犯罪を自分ののどにつまらせたままにいるしかないのだ」(p. 431)と、耐えられなくなってしまふ。このOの一場面は、キルケゴールが『不安の概念』の中で、口を割ろうとしない犯罪者に対して次のような有効な手段があると述べる箇所をライトが敷衍したものと思われる。

一裁判官が肉体の力と精神の緊張を十分に備えていて、たとえ16時間の長きにわたっても、その筋肉を微動だにもさせずに持ちこたえることができるなら、ついには相手の告白をわれにもなく洩らさせることに成功するであろう。良心の疚しい人間は、沈黙に耐えることができない。独房にとじこめておけば、かれは鈍くなってしまう。だが、裁判官がそこにおいて、書記が調書をとろうと待ちかまえている場合、沈黙は最も深く、するどい尋問であり、最も恐ろしい、しかし許されうる拷問である。(pp. 185-186)

第2次大戦後に、物資豊かなアメリカから大戦後の荒

廃のなかにあったフランスへ渡ったライトにとって、歴史や社会や現実の前で人間の存在がいかに無力であるかを知り、真の自由は現実に参加することによって獲得しなければならないと唱える長編小説『嘔吐』などのサルトルにおける実存主義文学は、大きな意味を持ったことは必然の結果なのである。

さらに、ライトは、実存主義文学が社会への参加の文学である以上、書齋での孤独な創作活動にとどまらず、積極的に社会や政治の問題に発言しようとして、IIIで述べたように仏米協会を設立してさまざまな社会、政治、時事問題に正面からかかわり合っていたのである。

ライトは1947年9月頃にアルベール・カミュの『カリギュラ』と『人道主義としての実存哲学』を購入し、9月6日には『異邦人』を読了して(*Quest*, p. 321)、日記に「見事な作品だが熱情に欠けている。さめた眼で書いている。文章は硬いが良い。アメリカでは、感情の描写がないと言われてこのような本は注目を浴びないだろう」(*Quest*, p. 321)と書き記している。そこでフランスとアメリカの読者を比較して、主人公はニヒリスティックではなく激情を表すように「突然、クロスがけたたましい笑い声をたてた。その部屋にいた者は一人残らずハッとしてからだをこわばらせた。ヒューストンは啞然としてクロスを見つめていたが、やがてその顔は怒りの形相に変わった」(p. 391)と描いている。

V

Oは、アメリカとフランスにおけるライトの体験の差から生まれた。しかしフランスの実存主義文学とOには大きな違いがある。この点についてはファールもこう言っている。

多くの共通点もありこれほど共通の政治的信条もあって、何年もともに仕事をしてきたのに、ライトとサルトルやボーヴォワールなどのフランス実存主義哲学者との差はどこから来るのだろうか。フランス知識人にとっては、実存主義哲学が、さほど心底から生まれたものでなく、概念的で「頭で考えたもの」であり、一言で言えば、『ブラック・ボーイ』に描かれたような現実的な喪失感や不安感を抱いていたライトとは違うからか。ライトの「アメリカ的」立場からか一つまり極端に走る国、フランスより都会化した国の現代人の苦境のせいなのか。¹⁹⁾

Oは、ライトが本来持っているアメリカ的素養をフランスを舞台に提出した論文のような体裁を持っており、かなり理詰めの様相を呈している。それでもなお、伯谷嘉信の言うように、カミュと比較するとライトの作品の

利点が浮かび上がってくる。

『アウトサイダー』の長所は、『異邦人』と比較すると明らかになる。デイモンはムールソーのようにニヒリストであることを告白するが、ムールソーと違って決して人間存在に無関心ではない。ムールソーは社会ばかりでなく自分自身からも疎外されている。友情、結婚、愛、成功、自由にも関心がない。しかしデイモンは皮肉なことに人生でこれらを追求し勝ち得ることができないのである。ムールソーはこうしたことから見捨てられ、自らもまったく無関心である。デイモンは黒人仲間からも浮いた存在で、知性的な仲間もいない。ただうちこもるのみである。デイモンは第2級の市民としてではなく、また知性のない人でもなく、1人の個人として認められたいと願う。一方で、ムールソーは社会の内部にこもっている異邦人であり外部へ飛び出たいと願っている。²⁰⁾

ライトは、フランスに到着した時点で、すでにミシシッピからシカゴへ、後にシカゴからニューヨークへ、と少なくとも2度もある意味では離国者となっていた。ライトがニューヨークを去ってパリへ来たとき、失敗するとわかっていた方法をあえて試そうとした。「そしてライトはフランスで離国者となったそのときから、アメリカ市民でもフランス市民でもなく、ミシェル・ファールの言う『世界市民』という自覚²¹⁾に至っていたのだ。Oは人種、国籍、思想という枠組みを越えて、自分はどこから来てどこへ行くのかという問題を探求しようとした作品なのである。

注

- 1) Richard Wright, *The Outsider* (New York: Harper & Row, 1953). 以下、訳は橋本福夫訳『アウトサイダー』(新潮社、1972年)を使用。
- 2) David Ray and Robert M. Farnsworth, eds., *Richard Wright: Impressions and Perspectives* (Ann Arbor: U of Michigan P, 1973), p. 145.
- 3) Michel Fabre, *The Unfinished Quest of Richard Wright*, 2nd edition (1973; Urbana: U of Illinois P, 1993), p. 302. 以下、*Quest*と略す。
- 4) Richard Wright, *Black Boy (American Hunger)* (1945; New York: Harper Perennial, 1993), p. 307. 以下、*BB(AH)*と略し、訳は高橋正雄訳『ブラック・ボーイ／アメリカの飢え』(講談社、1978年)を使用。
- 5) Hazel Rowley, *Richard Wright: His Life and Times* (New York: Henry Holt, 2001), p. 332.

- 以下、*Life* と略す。
- 6) Dorothy Norman, *Encounters: A Memoir* (San Diego: Harcourt Brace Jovanovich, 1987), pp. 195-96.
- 7) *Stockholm Expressen* (Mar. 1947), cited in Kenneth Kinnamon, comp., with the help of Joseph Benson, Michel Fabre, and Craig Werner, *A Richard Wright Bibliography: Fifty Years of Criticism and Commentary, 1933-1982* (Westport, CT: Greenwood, 1988), p. 274.
- 8) Anaïs Nin, *The Diary of Anaïs Nin: 1944-47*, ed. Gunther Stuhlmann (New York: Harcourt Brace & World, 1971), p. 189.
- 9) Constance Webb, *Richard Wright: A Biography* (New York: G.P. Putnam's Sons, 1968), p. 261.
- 10) William Gardner Smith, "Black Boy in France," *Ebony* 8 (July 1953), p. 36.
- 11) Bontemps's letter to Conroy, in "Letters," *New Letters* 39 (1) (Oct. 1972), p. 23.
- 12) William Gardner Smith, *Return to Black America* (Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1970), pp. 59-60.
- 13) Michel Fabre, *Richard Wright: Books and Writers* (Jackson: UP of Mississippi, 1990), pp. 86-87.
以下、*Books and Writers* と略す。
- 14) C.L.R. James, "Black Studies," *Radical America* 5 (Sep.-Oct. 1971), p. 89.
- 15) キルケゴール著(氷上英廣訳)『不安の概念—キルケ
ゴール著作集 第10巻』(白水社、1979年)
- 16) キルケゴール著(松浪信三郎訳)『死にいたる病』(白水社、1975年)
- 17) Claudia C. Tate, "Christian Existentialism in *The Outsider*," *Richard Wright: Critical Perspectives Past and Present*, ed. Henry Louis Gates, Jr. and K. A. Appiah (New York: Amistad P, 1993), p. 385.
- 18) Sartre's letter to Beauvoir, 25 February 1946, in *Quiet Moments in a War: The Letters of Jean-Paul Sartre to Simone de Beauvoir, 1940-1963*, ed. Simone de Beauvoir (New York: Charles Scribner's Sons, 1993), p. 276.
- 19) Michel Fabre, "Richard Wright and the French Existentialists," *The Critical Response to Richard Wright*, ed. Robert J. Butler (Westport, CT: Greenwood P, 1995), p. 120.
- 20) Yoshinobu Hakutani, "The Outsider, Racial Discourse, and French Existentialism," *Richard Wright and Racial Discourse* (Columbia: U of Missouri P, 1996), p. 154.
- 21) Mae G. Henderson, "Drama and Denial in *The Outsider*," *Richard Wright: Critical Perspectives Past and Present*, ed. Henry Louis Gates, Jr. and K. A. Appiah (New York: Amistad P, 1993), p. 407.

(H 14.11.21 受理)